

# 槐

かい

岡井省二創刊

創刊15周年記念特集号  
平成19年3月号



平成十九年三月一日発行 第十七巻第三号  
平成十九年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第一八九号 毎月一回 二日発行

こころ

高橋将夫

川上も川下もなし冬銀河  
魂も心も洗ふ寒の水  
重なりしままに燃え尽き櫓火かな  
心中の煮凝とけてゆきにけり

水餅にくるんでしまふ妬心かな  
あたたかなものに包まれ大枯野  
本当は雪がきらひの雪女  
漁のない冬の浜辺に立つ漁師  
雪吊の支へてゐたる時空かな  
阿字観の寒満月でありしかな  
寒の水仏心流れゐるごとし

# 師走賛歌

## 市場基巳

行く年の風に雨粒まじりけり  
露地に入る冬芽に雨のあるを見て  
たちまちに母消え街に聖樹立つ  
猫背なりけり海べりに寒波来て  
寒き日を選びて蛸が足伸ばす  
仔鼬と人いろいろと見る日かな  
しぐるるに仏を拝む出来ごころ  
公孫樹葉のいつしか失せし山詣  
地に落ちて桜紅葉の大きかり  
散りつくし丈あらたなる裸の木

## 特別作品

ひつかかりぬるごとき実や雀瓜  
見て通る放生池のかいつむり  
西国のけふ限りなき雪ばんば  
冬蛇の一隅にゐて薄日さす  
大綿の見えかくれして寒きこと  
山にある神や仏や雪降り出す  
凍蛇のしくしくと声ありにけり  
この冬のわれに妹なく瘤太る  
榎木燃ゆ音の日向へこだませり  
十二月火の粉まつはるごときかな

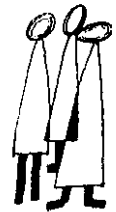
# 槐安集

市場基巳

どうしても見えぬ笹子と向ひをり  
せめて顔見たしと思ふ冬翡翠  
冷え症もぬて冬枯れの河口まで  
百千の鷗見しこと腑に落ちず  
明け方の二度寝の夢に穴惑ひ

水野恒彦

吹越や息つめて何やり過す  
火事の雲遠き日を追ふ目差しに  
少年老ゆ奥は雪野へづきけり  
葱提げて父を忘れてゐたりけり  
吉兆の日箭射してゐる勇魚かな



延広禎一

七面鳥エア―ギターの始まれる  
春慶の盆に置かるる冬至粥  
葛城の夜明けとなれり粥柱  
からみ酒に手を焼いてをる雪女  
なまぐさき系図を覗く七面鳥

加藤みき

水音は裏白叢の下に生れ  
いろいろな木の葉が舞へり神迎へ  
順番にうごく縁側大鯉  
二た三たび鴉の鳴けり大旦  
冬晴の陶の白狐の眼かな

石脇みはる

腋あらば八ツ手の花を蔵すべし  
木枯やラ・フランスの香あり  
さかり場のしやこばさぼてん花満つる  
臘八や納屋に藁束積みぬたる  
大年の剪り倒されし曼陀羅華

中島陽華

熱海の夜すつぽん鍋となりにけり  
入日かつ海金欄の蒲団かな  
煎餅をきつねに焼きてシクラメン  
二番倉開いてをりけり菊香る  
琵琶魚なり肝つ玉でもよかつたら

竹内悦子

吊るされて鮫鯨口を残しけり  
まだ山の眠つてをらぬ馬刺かな  
冬の夜のはじけてみたるざくろかな  
獅子柚子の濡れたるままを放られし  
先生のご糸に目覚めしおらが春

栗栖恵通子

鬼女燃へて冬の花火の吹かれをり  
葉のこはき大大根を抜きにけり  
綿虫の散らかつてをる羅生門  
白鯨のうしをに乗れる睡りかな  
初日また大日岳の二夕形りに

大島翠木

空海の池にくつさめ置いて来し  
やれはちす五つの穴の西に向く  
陶然とたぶらかすらん雪女  
師走満月走る白狐か白猫か  
聖樹点滅そのてつぺんからは宇宙

雨村敏子

マザーグース蓮の実眠る蓮の穴  
鮫鱈の顎より見ゆる果はたてかな  
鰯の眼のどこか津波寄す  
吾亦紅の一顆に影とひかりある  
綾とりの川の向かうの茜雲

黒田咲子

日方吹き鳥とまらずの冬芽起つ  
死に貌の傷ひとつなし狐畏  
休田の死角に猪のぬた場かな  
冬晴の鴉ふところ開けきつて  
ブルースも念佛もありき年忘

小形さとる

笹鳴くや阿僧あそうぞう祇ぎといふ数のこと  
反魂草わしたて儂わだても一枚加はるか  
冬虹や悪趣いよいよ盛んにて  
いねつるみ石いしが猿など生んでをる  
まくなぎや金と女が聳そびへをる



天野きく江

雪をんな番の蟹を食べ尽す  
大鉢の尻天狼に晒しけり  
臘月や今日の日像のうるうるす  
氷点と云ふブラックホール竜の玉  
悪夢とは冬の稲妻めきぬたる

本多俊子

梟にアンモナイトの光かな  
金星のますます大粒降誕祭  
銀杏落葉神々の息きらめきて  
海霧の中その奥深したなごころ  
播粉<sup>すりこぎ</sup>木を叩く音あり春星忌



# 槐市集

久保東海司

雪濡れのたてがみを梳く調教師  
福笹の葉擦れ家まで持ち帰る  
薄氷や沈みて棒の如き鯉  
定刻の雪の発着ままならず  
足もとの闇の流るる恵方道

近藤きくえ

みかん挽ぐ小粒を好み吾も鳥も  
高架橋灯り冬霧包みゆく  
沖晴れて甲高きこゑ磯焚火  
あらかたは散りし柿の葉土の彩  
落葉手に風と話をしてをりぬ

近藤公子

白子汁すすりて山の深眠り  
眼光や鷹赤軸を飛びたてり  
丹頂の空のもと水汲んでをり  
目も耳ももう一つ欲し去年今年  
鶏旦に仏も鬼も円座かな

近藤紀子

冬日さす風吹峠越えてをる  
石路の夕日に溶けしわたつうみ  
草の花かなしきまでに色いろいろ  
冬青染そよぞよのマフラーふはりたなごころ  
邪気払ふじやばらの飴の香かな



# 槐集

## 高橋将夫選

口広の瓶より落ちし十二月 枚方

中野 京子

寒禽の声高かりし聖地なり 岡崎

岩月優美子

白肌を虚空に伸ばす大根かな

ユトリ口の白に引き立つ枯木立

山眠り地の声天の声聞ゆ

白鳥やレダに近づくゼウスかも

発心にさくら落葉の紅残し

冬天に何を語らむ聖母像

極月の粟餅汁粉高瀬川

大鯨ガバリと地球動きたる

冬の水たましひ抜かれたる色に

枯つきるものの動かず神に合ふ 高松

大山 里

雪をんな身に底しれぬ沼のあり

佗助の白に足音とられけり

狐火やはつきりせぬもくつきりと

尻振つて水鳥ネジを巻きなほす

裏返して曼陀羅あらはるる樺火

己が影己がおどろく冬満月

迫りきし一雪嶺を夢にまで

狐火や沼底いつか黙り込む

葱の束抱へて橋を戻りたる

ポインセチア白羽二重の産衣かな 枚方

谷村 幸子

葬<sup>柩</sup>る日の冬虹へ飛ぶ白き鳩

寒昂大杉の弊湿りをる

大根の湯気に客間の額濡れし

青石に木の影ゆるる酢牡蠣かな

クリムトの琥珀のべーゼ冬果つる

産寧坂おりて時雨や赤ワイン

十二月終りに清浄歎喜団

太箸やすこやかであれ槐の樹

# 銀河往来 高橋将夫

口広の瓶より落ちし十二月 中野 京子  
十二月は早く過ぎる。忙しい。師も走る。これなら月並。ところが、「十二月は口広の瓶から何かこぼれ落ちる感じ」ときた。なんともユニーク。口広瓶だから何が落ちてもおかしくはない。まるで十二月がこぼれ落ちるようで愉快。

狐火はつきりせぬもくつきりと 近藤 喜子  
狐火は何だかはつきりしない存在だが、でも遠目にはくつきりと見えている。理屈はよく分らなくても、現象ははつきりと見える。逆に、科学的な説明で正体かはつきりしてくと、今度は輪郭がぼやけてくることもある。それに、世の中は両極性、両面性、重層性から成り立っている。化台も融合も和合もある。少し飛躍するが、例えば絶対とか権威などは無い方が自然だと思ふ。俳句においてもまた然り。

クリムトの琥珀のペーゼ冬果つる 竹中 一花  
クリムトのペーゼの絵は知らない人も多いと思う。しかし「琥珀のペーゼ」から黄や金色の背景の中での接吻のシーンは想像できよう。作者がそこに冬の果を見ているところがポイント。

寒禽の声高かりし聖地なり 岩月優美子  
寒さの中で高鳴きする小鳥の声がなんともいたいたしい。聖地

であるだけに、なおさらの感がするが、いたしかたなきこと。たとえ聖地でも寒さに変りはしないのだ。

枯つきるものの動かず神に合ふ 大山 里  
「枯つきるものの動かず」はごくありふれた措辞。「動かず」の後に一呼吸置いて続く「神に合ふ」で目を覚まされた。枯れきった静寂の中で作者は神を見ているのだ。沈黙の対話といえるかもしれない。

ポインセチア白羽二重の産着かな 谷村 幸子  
白羽二重の産着の嬰兒を囲む幸せな家庭の情景が見える。ポインセチアの赤が実に鮮やかな色取を添えるとともに、一句に新鮮味を与えている。

綿虫を払ひ入りたり阿修羅像 近藤きくえ  
「入りたり」で切れているから、入ったのは作者だろう。そして、そこに阿修羅像を見た。綿虫のやさしさと阿修羅の激しさが自然な形で照応していて心を打つ。もとより、綿虫も阿修羅像も同じ時空に存在している。何でもないようできて、尋常ではない。

藁塚の芯なる棒や親鸞忌 南 一雄  
やわらかな藁を積み上げた藁塚。そんな藁塚にある芯棒に作者は心をひかれた。親鸞といえば他力本願の世界。厳しい修行の自力本願に対比される世界だが、藁塚の芯から作者の思いが伝わってくる。(以下略)